

特別研究会

「農と文明を考える」シリーズ 第1回

これからの富国有徳の国づくりと 農林水産業

川勝 平太



当研究所においては、直面している喫緊の政策課題への対応とは別に、大きな経済社会情勢の動向を踏まえ将来のあるべき農林水産施策の方向を模索するため、特別研究会「農と文明を考える」シリーズを開催することとした。

その初回として、国際日本文化研究センターの川勝平太教授をお招きし、「これからの富国有徳の国づくりと農林水産業」と題した講演を頂いた。なお、川勝教授は当研究所の参与であり、当日の講演は、14年度第1回参与会議の開催に先立って行われたものである。以下、その概要を紹介する。

昨年9月の同時多発テロ後、ブッシュ大統領は、「米国は今戦争状態にあり、文明世界は前例のない危機に直面している。文明を守るため悪の枢軸と戦わなければならない」と述べた。これを受け我が国の小泉首相も、本年2月の施政方針演説のなかで「文明社会に対する重大な挑戦であるテロとの闘い」の必要性を訴えた。このように、文明という言葉は、21世紀における重要なキー・コンセプトになることが予想される。

ヨーロッパ的には、文明は真、善、美の3種類の価値を有している。これらはいずれも重要であるが、力点の置き方は歴史的に変化している。ルネッサンス期は、神の真理を人間の理性により明らかにすることを目指したように「真」に重点が置かれていた。産業革命後は、「平等こそ善」という考え方と「自由こそ善」という考え方が対立するようになり、「善」に力点が置かれるようになった。そして冷戦時代後の現在、独善による対立の時代は終わり、地球環境問題への関心が高まるなか「美」に力点が移りつつある。

また、地球は真か、善かという問は適切ではないが、地球は美しいかというのは適切な問いかけである。46億年の歴史を経て水の惑星となった地球に最も即した価値は、「美」と言えよう。さらに日本人の場合、美意識のなかに真理や善悪を含んでみる文化を持っている。また、その審美観は、「水際立った」、「水茎のあと」、「水に流す」といった言葉に表されているように水と強く結びついている。我々の美意識は水に即して培われてきたのである。

真、善の文明は、己の真理・正義を押しつけようとする「力の文明」であった。21世紀においては力の文明から美の文明へ転換していくのであれば、日本の出番がきたのかなと思われるのである。

次に、日本とヨーロッパとの関わりについて述べてみたい。明治維新の際の「米欧回覧実記」を読むと、使節団は、欧米の産業文明に仰天しながらも追いつけると確信するとともに、世界の多くの美しい風景を見てきたにも関わらず最後は日本の景観の美しさを再確認する。いわば「日本発見」の旅だったのである。同じ時期に日本を訪ねたヨーロッパ人の多くも、日本の美しい風景に感銘を受け記録に残している。また、日本に来たことがないルノワールやモネも、浮世絵から大きな影響を受けている。

このような日本の美しさは「ルーラル」の美しさである。それは農村だけではなく、都市・農村を通じたルーラルの美である。第5次全国総合開発計画（平成10年）においては、地域の個性を重視した美しい多軸型国土の形成を目指し、「多自然居住地域」の創造を第1の戦略として打ち出した。「食料・農業・農村基本法」では農業の多面的機能が明記されたが、これは、農業・農村は、非農業者を含む国民全員の財産であるということを明確にしたものである。検討されている新首都の候補地も、いずれも自然の豊かな山地と平野の境に位置している。

農林水産業については、専業農家が著しく減少する一方で、サラリーマン等をやりながら片手間に農業ではなく土いじりをしたいという人たちが増えている。このような農民以外の国民が簡単に借地できて、プロの業（なりわい）としての農業ではない「農」を楽しむ「サラリーマン小作」を組み込んだ体制を作っていくことが現実的ではないか。

そのためには、都市でも庭の中に家を設け（ガーデンシティー）、土いじりが楽しめるようにすることが重要である。農産物輸入が急増している今がチャンスである。国民は食品の正確な由来を知りたがっている。食と農を結ぶ一番の基礎は自分の庭であり、多面的機能に接する第1歩にもなる。学校給食も重要で、地域農産物を食べる日を確保することにより地産地消が実感されるようになる。

戦後の我が国は経済成長を目指し豊かさを実現した。富があること、貧困を克服したことは誇るべきことである。日本は、richでprosperous、かつcivilizedであるべきで、これを漢字に直せば「富国有徳」となる。この精神の下、都市・農村を問わず、日本全体を水と緑のしたたる景観の国に変えていくことが重要ではないだろうか。

（文責 中田哲也）

